

平成31年度

熊本中央高等学校

一般入学者選抜学力検査問題

**国 語**

時 間 50分

平成31年2月13日実施

注 意

1. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
2. チャイムに従って、開始及び終了しなさい。
3. 終了のチャイムが鳴ったら、問題を机上の右に、  
解答用紙を左に置いて待ちなさい。
4. 試験監督に用がある場合は、黙って挙手しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

県大会の前日はさすがに七時前に克久も家に帰って来た。「ただいま」と戻った姿を見た百合子はたちまち全てを①了解した。了解したから、トンカツなどをあげたことを後悔した。大会にカツなんて、克久流に言えば「かなりサムイ」じゃれだった。

「ベンちゃんが今日は早く風呂に入って寝ろってさ」

「そうなんだ」

百合子はこんな克久は見たことがなかった。なんでもなく、普通そうにしているけれども、全身に緊張があふれていた。それは風呂場で見せる不機嫌な緊張感とはまるで違った。ここに何か、一つでも余分なものを置いたら、

A 糸が切れる。そういう種類の緊張感だった。

彼は全身で、いつもの夜と同じように自然にしてほしいと語っている。「明日は大会だから、闘いにカツで、トンカツ」なんて駄ジャレは禁物。

もっとスマートな応対を要求していたのである。会話だって、音楽の話もダメなら、大会の話題もダメであった。そういうことが百合子にも解る顔をしていた。こんなに穏やかな精神統一のできた息子の顔を見るのは初めてだ。一人前の男である。誇りに満ちていた。

もちろん、彼の築き上げた誇りは輝かしいと同時に危ういものだ。

(中略)

「あのね、仕事の帰りに駅のホームからうちの方を見たら、夕陽が斜めに射して、きれいだった」  
「そう。……」

なんだか、ぎこちない。克久も何か言おうとするのだが、大会に関係のない話というのは探しても見つからない。

それでも、その話はしたくなかった。この平穩な気持ちを大事に、

**B**

、明日の朝までしまっておきたかった。

② 初めて会った恋人同士のような変な緊張感。それにしては、百合子も克久もお互いを知り過ぎていた。百合子は「こいつは生まれる前から知っているのに」とおかしくて仕方がなかった。

「……」

改めて話そうとすると、息子と話せるザツダン<sup>ウ</sup>って、あまり無いものだたと百合子はミョウ<sup>エ</sup>に感心した。

「……」

克久は克久で、何を言っても、話題が音楽か大会の方向にそれていきそうで閉口だった。

「これ、うまいね」

こういうことを言う時の調子は夫の久夫が百合子の機嫌を取るのに似ていた。

**C**

言ってから、少し遅れてに

やりと笑うのだ。

「西瓜<sup>すいか</sup>でも切ろうか」

久夫に似てきたが、よく知っている克久とは別の少年がそこにいるような気もした。

「……」

西瓜と言われれば、すぐ、うれしそうにする小さな克久はもうそこにいない。

「……」

百合子は西瓜のことを聞こうとして、ちょっとだけ息子にエンリョ<sup>オ</sup>した。彼は何かを考えていて、ただぼんやりとしていたわけではない。少年の中に育ったプライドはこんなふうにある日、女親の目の前に表れるのだった。

④ 「西瓜。少しだけ食おうかな。腹こわすとまずいから」

問一 二重傍線部ア〜オのカタカナは漢字に直し、漢字には読みを付けなさい。

問二 空欄A〜Cに入る適語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア ぼそっと      イ ぎゅっと      ウ ぷつんと      エ そっと      オ きっと      カ ずっと

問三 傍線部①「たちまち全てを了解した」とありますが、百合子は克久のどのような気持ちを了解したのですか。本文中から十九字で抜き出しなさい。

問四 傍線部②「初めて会った恋人同士のような変な緊張感」に用いられている表現技法を漢字二字で答えなさい。

問五 傍線部③「別の少年がそこにいるような気もした」とありますが、百合子がそう感じたのはなぜですか。本文中の語句を用いて二十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「西瓜。少しだけ食おうかな。腹こわすとまずいから」とありますが、この言葉に込められている克久の気持ちを十字以内で二つ説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「創作は感性だ」「作家の思いだ」と言い切ってしまうほうが作家としては恰好かっこうがいいが、残念ながら自分独自の感覚だけでゼロからすべてを創造するなんてことはあり得ない。

とすると、僕はバクゼンアとした感性なるもので創造をしているわけではないということになる。

作曲には、論理的な思考と A を要する。

論理的思考の基になるものが、自分の中にある知識や体験などの集積イだ。何を学び、何を体験して自分の血肉としてきたかが、論理性の根本にある。

感性の九五パーセントくらいは、実はこれなのではないだろうか。

【Ⅰ】、その論理性に基づいて思考していけば、あるレベルに達するものはいつでもできるはずだということになる。気分が乗った乗らないという次元に関係なく、きちんと仕事をしたらしたなりのセイカウを上げられる。

だが、問題はそれさえあればものづくりができる、作曲ができるということではないところだ。肝心な要素は、残りの五パーセントの中にある。それが作り手のセンス。感覚的ひらめきである。創作にオリジナリティウを与えるその人ならではのスパイスのようなもの。これこそが B “力の肝”だ。

ものづくりにおける核心は、やはり C だと僕は思う。こっちの方向に行ったら何か面白いものができそうだというのは、直感がミチビクエものだ。直感の冴えキが、作品をどれだけ素晴らしいものにできるか、よりクリエイティブなものにできるかという鍵をニギオっている。

【Ⅱ】、もっと突き詰めていけば、その直感を磨いているのも、実は自分の過去の体験である。ものをつくるということとは、ここからここまでは論理性でここからが独自の感覚だと割り切れるようなものではなくて、自分の中にあるものをすべてひっくりかかす状態の中で向き合っていくことだ。

論理や理性がなければ人に受け入れてもらえないようなものはつくれないが、すべてを頭で整理して考えようとしても、人の心を震わせる音楽はできない。秩序立てて考えられないところで苦しんで、もがいて、必死の思いで何かを生み出そうとする。その先の、自分でつくってやろう、こうしてやろうといった作為のようなものが意識から削ぎ落とされたところに到達すると、人を感動させるような力を持った音楽が生まれてくるのだと思う。

(久石 譲「感動をつくれますか?」より)

注1 オリジナリティ…… 独創性

注2 クリエイティブ…… 創造的

注3 カオス……… 大混乱

問一 二重傍線部アゝオのカタカナは漢字に直し、漢字には読みを付けなさい。

問二 空欄Ⅰ・Ⅱに入る適語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところが                    イ つまり                    ウ やはり                    エ だから                    オ おそらく

問三 空欄Aに入る適語を次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 知識や体験                    イ 感性                    ウ きちんとした仕事                    エ 感覚的なひらめき

問四 傍線部①「それ」の指示内容を本文中から六字で抜き出さない。

問五 空欄B・Cに入る適語を本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出さない。

問六 傍線部②「人を感動させるような力を持った音楽が生まれてくる」とありますが、筆者はそのためにはどうすることが必要だと考えていますか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

博雅三位の家に、盗人入たりけり。三品、板敷のしたに逃かくれにけり。盗人帰り、さて後、はひ出て家の中をみるに、のこりたる物なく、みなとりてけり。ひちりき注2一を置物厨子注3にのこしたりけるを、三位とりてふかれたりけるを、出てざりぬる盗人、はるかにこれを聞て、感情おさへがたくして、帰きたりて云やう、只今の御ひちりきのねをうけたまはるに、あはれにたふとく候て、悪心みなあらたまりぬ。とる所の物どもことごとくにかへしたてまつるべしといいて、みな置きて出にけり。むかしの盗人は、又かくいうなる心も有けり。

〔古今著聞集〕より〕

注1 三品………博雅三位のこと

注2 ひちりき………雅楽に使う管楽器の一つで、竹製の縦笛のこと

注3 置物厨子………置物用の棚で取り付けになっており、両とびらを付けたもの

問一 本文中に現代仮名遣いで表記されている単語があります。それを二字で抜き出し、歴史的仮名遣いに直しなさい。

い。

問二 二重傍線部A、B、Cの意味として適切なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- |   |      |   |       |   |        |   |      |   |        |
|---|------|---|-------|---|--------|---|------|---|--------|
| A | みな   | ア | 全員    | イ | ほとんど   | ウ | すべて  | エ | わずか    |
| B | はるかに | ア | とても   | イ | たいそう   | ウ | 遠くに  | エ | どこかに   |
| C | あはれに | ア | しみじみと | イ | かわいそうに | ウ | かわいく | エ | みすばらしく |

問三 この文章には会話の部分があります。最初と最後の三字を抜き出さなさい。

問四 傍線部①「三位とりて」とありますが、手に取ったものは何ですか。本文中から抜き出さない。

問五 傍線部②「感情おさへがたく」とありますが、盗人は何に感動したのですか。説明しなさい。

問六 傍線部③「悪心みなあらたまりぬ」とありますが、その結果、盗人はどのような行動をしましたか。説明しなさい。

問七 傍線部④「むかしの盗人は、又かくいうなる心も有けり」とありますが、その現代語訳として適切なものを、

次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 昔の泥棒は、このような義理堅い心をもっていたのだ。

イ 昔の泥棒は、このような風流な心をもっていたのだ。

ウ 昔の泥棒は、このような柔軟な心をもっていたのだ。

エ 昔の泥棒は、このような親しいな心をもっていたのだ。



四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I 祇園精舎の鐘の聲、1の響きあり。娑羅双樹の花の色、2の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

II 3、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、4光りたり。

III 春は5。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる6の細くたなびきたる。  
(中略)

7は夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。

IV 8、日暮らし、硯に向かひて、9にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

V 月日は百代の10にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に11を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして12をすみかとする。

問一 空欄1～12に入る適語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア 夏	イ 秋	ウ 冬	エ 夜	オ 昔
カ 心	キ 目	ク 旅	ケ 雲	コ 雪
サ つとめて	シ 今は昔	ス をかし	セ 竹の中	ソ 筒の中
タ 生涯	チ 人生	ツ 過客	テ 盛者必衰	ト 諸行無常
ナ あげぼの	ニ つれづれなるままに			

問二 I～IVの作品名と、III・IVの作者名を答えなさい。

## 五

次のI～IVは漢字の成り立ちを説明したものである。その説明文に合うものを語群から選んで、記号で答えなさい。

I 二つ以上の文字を組み合わせて、新しい意味を示したもの。

例(林・鳴)

II 物の形や様子を描いた絵文字を略したもの。

例(月・川)

III 意味を表す文字と、音を表す文字とを合わせてできたもの。

例(姉・露)

IV 形で表せない数や地位などの事柄を、記号や図形で表したものを。

例（上・下）

語群    ア 指示文字                    イ 会意文字                    ウ 象形文字                    エ 形声文字

**六**

次のI～Vの空欄に適切な漢字一字を入れ、故事成語を完成させなさい。

- I 五十歩  歩
- II 蛇
- III 四  楚歌
- IV  盾
- V  敲